

題目 ウマの嫉妬に関する実験的検討

氏名 小野千絵里

指導教員 瀧本彩加

近年、嫉妬は、ヒト特有の情動ではなく、ヒト以外の動物にも見られる情動であると考えられるようになってきている (e.g., Morris, Doe & Godsell, 2008)。同種他個体に対する嫉妬については、ウマ (*Equus caballus*) の観察研究 (Schneider & Krueger, 2012) がある。半野生のウマが、自分と親密な個体とライバル個体との親和的交流に介入することで、親密な個体をめぐり争いが生じるのを防ぎ、コストを最小限に抑えながら自分にとって重要な関係性を維持しているというのである。また、家畜動物においては、異種であるヒトに対する嫉妬の実験研究も報告され (イヌ: *Canis familiaris*; Harris & Prouvost, 2014; ネコ: *Felis catus*: Bucher, Arahori, Chijiwa, Takagi & Fujita, 2020)、イヌでのみ、ヒトに対する嫉妬が確認された。この種差が生じた理由について、ヒトと長く協働してきた歴史がイヌにおけるヒトに対する嫉妬の発生を促進したためではないか、と考えたため、本研究では、イヌと同じくヒトと長く協働してきた歴史を持つウマを対象に、ヒトに対する嫉妬を実験的に検討した。具体的には、ウマにとって親密な人と見知らぬ人がそれぞれライバル個体 (隣のウマ) またはライバル物体 (ほうき) をかわいがる様子を呈示し、ウマの反応を調べた。嫉妬は愛着を抱く対象に生じるため、もしウマがヒトに対して嫉妬するならば、親密な人がライバル個体をかわいがる時に、その人がライバルに対して行う演技への関心を高め、嫉妬を反映する行動を多く行うだろう、と予測した。具体的には、親密な人がライバル個体をかわいがる条件で、親密な人がライバル物体をかわいがったり、見知らぬ人がライバル個体・ライバル物体をかわいがったりする条件でよりも、ウマは人がライバルに対して行う演技をより長く頻繁に注視し、より頻繁に接近するだろう、と予測した。実験をした結果、嫉妬を反映すると考えられる行動指標 (注視回数・第一注視時間・合計注視時間・平均注視時間・接近回数) について、ヒトとの親密性とライバルの種類の主効果とそれらの交互作用は有意ではなかった。これらの結果は、ヒトとの親密性やライバルの種類がウマの行動に影響しなかったことを示しており、ウマにおけるヒトに対する嫉妬が確認されなかったことを示唆している。本研究では、実験手続き上のいくつかの不備によって、ウマにおけるヒトに対する嫉妬を引き出せなかった可能性があるため、手続きを修正し、ウマがヒトに対して嫉妬を示すのかについて再検討する必要があると考える。